

今年も来年も…ずーっと原発のないクリスマスを！



原発さよなら四国ネットワーク 大野恭子

今日 12 月 22 日は、今年最後の松山市駅前での街頭活動でした。街中クリスマスモード一色です。いつもの和太鼓の演奏と歌をバックに、ピンクのチラシを配りました。そのチラシには、「今年も来年も…ずーっと原発のないクリスマスを！！原発を持つ国で、現在一基も原発を動かしていない国は日本だけ。うれしいですね！おめでとう！」とサンタクロースが担いだ大きな袋に書いているのです。

伊方原発再稼働がトップだろうとマスコミで喧伝され、その危機感もあり、「12・1 NO NUKES えひめ -福島を忘れない 伊方を稼働させない-」の集会には今までで最高の 8000 人超の方々が全国から-北海道から沖縄まで-集まってくださいました。ご支援、ご参加に心より感謝申し上げます。私たちの「原発いらない！」の圧倒的民意は会場の松山城山公園と隣の愛媛県庁にこだましたのでした。そして現地の人間としての責任を強く感じた日ともなりました。

そもそも四国の太平洋側には、M9 クラスの巨大地震が 20 年待たずに起きるかもしれないと予想される南海トラフがあり、瀬戸内海には伊方原発沖 6~8 km に世界有数の A 級の中央構造線活断層が横たわり、まさに活動期にあるといわれています。「おそらくその断層は伊方原発直下に傾いてもぐりこんでおり、動けば M8 以上、2000 ガルまで地震動を想定すべき、その地震は約 1 秒で伊方原発を直撃、制御棒が入るのにおよそ 2 秒かかるので、とうてい挿入が間に合わないだろう。」と国の中央防災会議委員で高知大学特任教授の岡村眞氏は警告を発しています。

それを承知で、過酷事故が起きることを前提とした「原子力規制委員会」の安全審査が急ピッチで行われています。四国電力はさまざまな独自の計算式を編み出し、従来の設計地震動 570 ガルで計算したが余裕があるので地震の揺れも津波もクリアできる、と豪語しています。

10 月 26 日には規制委員会から更田豊志委員が現地調査にはいり、「(事故防止に向けた四電の取り組み姿勢に) 非常にいい印象を受けた。」「伊方原発は重大事故対処設備において先頭集団にいる。」とコメント。

しかし、12 月 18 日、愛媛新聞社が東京で更田委員に単独インタビューをし、そこで彼は前言を翻す発言をしたのです。

「プラント関係に限れば、(審査状況は、申請のあった原発を) 四つのグループに分けると伊方は 2 番手・・・準備状況やサイト条件の良さからいうと、九州電力の玄海、川内の両原発が一番進んでいる。それに次いで僅差で伊方ではないか。」

あたかも競馬のようにお尻に鞭打ち全国の原発再稼働を競争させようという姿勢に愕然とします。曰く、「今回の基準では、電源車や消防ポンプ車など臨機応変に動けるものを要求している。伊方は斜面に立っている。…九電の 2 サイトが比較的有利といったのはまっ平らで広い。非常にスペースに余裕があり、淡水をとる池を持っている。重大事故対策の観点からすると、そういったサイトは有利だ。伊方が重要免震棟を持っていることは有利だったが、審査を始めてみて意外だったのは、早くつくってしまったがために(新規制基準に)フィットしていない部分もある。」

伊方町原発担当職員は言います。「100%被ばくしないということは考えていない。」と。私たち全国の住民は、さらなる「原発への人身御供」になることを受け入れることはできません。